

# いきいき 行田人

## 「藍」に愛を注ぐ第二の人生

永沼

とくいちろう  
督一郎さん (72歳・白川戸)

江戸時代から大正時代にかけて盛んだった行田の藍染めを楽しむことができる体験型観光スポット「藍染体験工房『牧禎舎』」。その館長を務めるのが、今月紹介する永沼督一郎さんです。永沼さんが少年時代の行田は、足袋の生産量が日本一であり、その素材である綿糸を藍染めする紺屋も数多く存在し、まちは活気に溢れていました。永沼さんの父親も紺屋を営み、幼いころから藍染めの製品に親しんでいましたが、意外にも藍染めを初めて体験したのは、定年退職した後だったそうです。仕事で藍染工場を見学したことがきっかけで、市内の染色家である熊井貞夫さんと知り合いになった永沼さん。熊井さんから「時間があるなら藍染めをやろう」と誘われ、藍染めができる状態にする「藍を建てるところから本格的に教えてもらいました。素人の永沼さんにとって、藍建て作業は困難を極めました。藍染めの染料である固形「すくも」を、水溶性の染料に還元・発酵させ、それを入れた藍甕に、水・砂糖・石灰などを混ぜ



2週間かき直し続け、藍を発酵させるといった作業を手間暇掛けて行っても、美しい藍色に染まるどころか、まったく染まらないこともあるのです。悪戦苦闘する永沼さんの姿を見た人から「何でこんなことをやっているの」という声もあつたそうです。しかし、「この伝統工芸をまちづくり役に役立てたい」という思いから、何度失敗してもあきらめずに試行錯誤を繰り返しました。そして、1年後に納得いく藍がついに完成。61歳の時に、熊井さん宅の敷地内にある足袋蔵を利用し、気軽に藍染め体験ができる「藍染体験の館」をオープンさせました。多くの観光客を集めた藍染体験の館でしたが、永沼さんが67歳の時に体調を崩したことで閉館となってしまいました。

2年間療養し、体調が回復した永沼さんに、NPO法人ぎょうだ足袋蔵ネットワークから「伝統工芸である藍染めを気軽に楽しめる施設を作りたいので、力を貸してほしい」という依頼が舞い込みます。この依頼を快く引き受けた永沼さんでしたが、「2年間ブランクがあったから、藍建てできるか不安だったよ。でも、ここで初めて藍建てできた時は感激したね」と振り返ります。平成22年5月にオープンし、1年半が経過した牧禎舎。観光客が、自分で染めた作品を見た瞬間の驚きの声を聞くと永沼さんはやりがいを感じ、ますます元気になるそうです。「この伝統工芸で魅力的なまちづくりの助けになりたい。そのために、後継者も育てなきゃね」と生き生きと語る永沼さんからは「藍」への愛がひしひしと伝わってきました。

## 私の作品

### 俳句

忍 岡田 修

青田暮れ夕づつ生まる母郷かな

佐間 藤田 久仁

揚羽蝶小さき暮しの中に入る

荒木 小林 康男

赤い羽根新大関も募金箱

荒木 高澤よね子

抽んづる鉄砲百合の白深し

荒木 国島 初江

きのふ今日元気に感謝敬老日

門井 宮田 淑尚

満月やつくづく丸き妻の顔

埼玉 武笠 文字

葉の間にあざがお映えて競いあい

埼玉 杉山 典子

花々も色を重ねて秋涼し

持田 丸山 麟一

群れて来て何処へ行くか秋あかね

齋条 中村 英子

昼さがりせみの合唱つら山で

桜町 吉岡 守子

運動会空にぼっかり白い雲

城南 町田ツギ子

鯛雲見上げる年になりにけり

佐間 須永 節子

新涼や待合室の小座布団

持田 伊藤 洋子

鈴虫や万葉の世も唄いしか

持田 田子 敏枝

まつげつけ似顔絵とどく敬老日

(木島 斗川 監修)



『たびのまち』(藍染)  
大谷 美咲(下池守)

◎皆さんの作品を募集しています。  
◎俳句は毎月5日までにはがき・封書で広報広聴課へご応募ください。